

## 第1節 はじめに

日本近代文学はその一側面として、出発当初からさまざまなかたちで「朝鮮」(ここでは以下の論述の都合上、一九一〇年、日本によって改称された地域名としての「朝鮮」を用いる。以下「 $\wedge$ 」は省略)を捉えてきた(一)。それは、内実はどうであれ、一種の朝鮮体験といえる。

いま、その体験を時代別に概観すれば次のようになる。まず、明治期においては、文学は朝鮮をおもに政治的な側面から捉えることが多かった。明治新政府はその発足当初から「朝鮮国」の「緩服」を意図し(二)、以後、壬午軍乱、甲申政変、日中戦争、日露戦争などの戦乱・戦争を経て、朝鮮を植民地化(朝鮮併合)するにいたる。文学はこれらの歴史的事件・出来事に呼応するかたちで朝鮮を描いたが、その目で朝鮮をとらえた少数の作家、たとえば国木田独歩や正岡子規がいるが、彼らもまた日本の政治的「優越性の意識からは自由ではなかった」のである(三)。その意味で、明治期の朝鮮体験は、一面的、恣意的であったといえる。

大正年間には、新しく獲得した植民地に対する好奇心やさらにはプロレタリア文学の勃興にもなつてその体験内容は大きく変化、拡大した。すなわち、大正初期には新しく獲得した植民地への興味から、旅行記や案内記が盛んに出され、朝鮮の風土、名勝地、風俗、習慣、人心のありさまなどが詳しく報道、紹介された。しかし、この種の旅行記には文明という一つの標準として日本を固定し、そこから「異郷」 $\vee$ としての朝鮮を捉えようとする枠組が強固に存在したため、朝鮮は皮相的、興味本位にしか捉えられなかった。朝鮮の実態は正確に把握されるにいたらなかったのである。また、大正末期に隆盛を迎えたプロレタリア文学は、同志愛的な連帯感のもとに抑圧される朝鮮民衆のすがたを描き出そうとした。なかでも、中西伊之助の一連の作業や中野重治の詩「朝鮮の娘たち」「雨の降る品川駅」などは出色だった(四)。しかし、概してプロレタリア文学はその思想性が先走り、体験の裏打ちがないまま、観念的なものに留まった感は否めない。一口に言えば、大正期の朝鮮体験も浅薄で皮相的であったということが出来る。

そして、本研究で扱う昭和期を迎えることになる。昭和期は、すでに植民地の歴史が長く、その支配・被支配体制もかなり安定してきたところから、文学の上でもそれ以前の時事的、旅行期的な内実とは異なる本格的な朝鮮体験がなされた。とくに一九三〇年代以後のプロレタリア文学の崩壊とそれにつづく国策文学の懲罰のもとで、朝鮮では「内鮮一体」の論理が強化され、文学は以前とは異なる新たな朝鮮を描く必要性に迫られた。その最も象徴的なのが、朝鮮で幼年期を送っ

たいわば植民地二世作家の登場である。本研究で扱う湯浅克衛と中島敦がその一例に当たる。また、日本人作家だけではなく、植民地教育が二十年をこえた一九三〇年代からは、日本語で本格的な創作が可能な朝鮮人作家が日本の文壇に登場してくる。その新しい世代の筆頭が張赫宙であり、それに続いたのが金史良であった。一方、朝鮮文壇においても、日本語による創作を試みる作家たちが現れたが、戦時色の強まった一九四〇年前後には、彼らを含めて多くの朝鮮人作家は半ば強制的に日本語による創作を強いられた。その代表的な作家が、創氏名牧洋を名乗った李石薫であった。同時に、この頃、そうした朝鮮人作家の姿を日本人作家がみつめ、描くという重層的な関係も生じた。田中英光は、戦時期朝鮮に常住し、『国民文学』に深く関与しながら、李石薫をモデルに幾篇かの小説を書いている。

本研究は、戦前の昭和期に限定し、朝鮮体験を描いた文学作品の分析を通じてその体験の意味を明らかにすることを意図する。しかし、昭和文学の朝鮮体験と一言でいってもその分野と対象は多岐に渡り、複雑な様相を呈することはいうまでもない。そこで、本研究においては、日本の国策、政治体制と密接に関わる日本人作家三人と朝鮮人作家三人の計六人の作家を通して、それらの体験の諸相をさぐって見ることにした。日本人作家だけではなく朝鮮人作家をとりあげるのは、朝鮮および朝鮮人像を支配側・被支配側の両面という重層的な視点から立体的に浮かび上がらせるためである。このようにして、朝鮮体験の視点から昭和文学、ひいては植民地をめぐる歴史・社会・文化などの諸問題を、いやゆる学際的な視点から総体的に眺望していきたい。これらの考察を通して、昭和文学の持つ新たな一断面が提示できると思われる。

## 第2節 昭和の作家群像と植民地空間

以下、本稿で扱う昭和文学のなかで朝鮮と関わった六人の作家とその時代を簡単に紹介する。

### 1 中島敦

中島敦が、父の転任に従い、静岡県浜松尋常小学校から、朝鮮京城の龍山小学校に転校したのは、一九二〇年九月の第二学期のことであった。これは、父親が龍山中学校の漢文の先生として転任することになり、一家が朝鮮に移ったからである。当時、外地では相当の加俸があり、外地手当などを入れれば給料がおよそ日本で働いた場合の二倍になるため、生活に苦しかった父親は朝鮮行を選択した

という。住所は漢江通り六番地。軍隊と鉄道の町で、龍山小学校とは近い距離であった。龍山は朝鮮の中心的な終着駅の龍山駅を擁していることもあって、南山の麓の明治町とともに日本人のおもな居住区域であった(2)。また、山の中腹には、一九一八年から新しく編成された朝鮮軍司令部が置かれており、さらに一九一九年からは新しく増設された二十師団が駐屯していたことから(3)、まさに軍事、交通の要衝で、植民地支配の中心地といえる町であった。中島敦が通っていた龍山小学校は、周りのそういう雰囲気に含まれて、学校の生徒も自然に鉄道関係や軍事関係の子弟が多かったであろう。龍山小学校での様子の一部は、「虎狩」の中で描かれているが、そこには趙という朝鮮人の学生が登場している。当時の朝鮮の教育制度では、小学校、中学校は日本人の生徒が入る学校で、普通の朝鮮人の生徒はそれに対応する普通学校、高等普通学校に進学するシステムになっていた。そのため、朝鮮人が日本人の通う小学校に入るのは、非常に珍しいことで、特別のケースでなければ入れなかった。一方、中島敦が龍山小学校に転入した時は、まだ一九一一年寺内総督下で発布された第一次朝鮮教育令の時代だったが、一九二一年十一月には、前年の三・一萬歳運動の影響で第一次教育令の改正が行われ、さらに中島敦が京城中学校に入る一九二二年には、第二次朝鮮教育令が発布されるなど、教育制度の変化がめまぐるしい時期であった。「虎狩」では趙も京城中学校に入学するが、一九二二年に発布された第二次朝鮮教育令は、「国語を常用するもの」と「国語を常用せざるもの」というかたちで、日本人の小学校と中学校、朝鮮人の普通学校と高等普通学校という分離教育は変わらず、かえって差別教育を制度として認めるものであったという(4)。中島敦が龍山小学校と京城中学校で付き合うことになる「虎狩」の趙のような朝鮮人生徒は、この制度からみても特別のケースの生徒であったと思われる。

一方、中島敦が朝鮮に渡った一九二〇年は、植民地政策の大きな転換期であった。前年の万歳事件により、寺内総督以来の憲兵警察制度による武断政治が廃止され、前年の八月に赴任した齋藤実総督によって「文化政治」が標榜された。

「一視同仁」を標榜しながら出発した齋藤総督の「文化政治」により、一九二〇年には『朝鮮日報』（三月創刊）『東亜日報』（四月創刊）などの新聞を始め、多くの文学雑誌の出版が許された。中島敦が京城中学校に入学したのは、ちょうどこのような雰囲気の中であったが、中学二年のときには関東大震災による朝鮮人虐殺事件が起っている。その模様の一部が「巡查の居る風景」の中で生かされている。そして一九二六年四月、一高進学のため朝鮮を離れることによって、中島敦の朝鮮での生活はいちおう終わりを告げる。朝鮮での滞在期間は五年半であった。以後、大連に転任している父親を訪ねるため、または「プールの傍で」での時代背景になっている一九三二年の南満州、中国北部旅行のついでに京城に

寄ったこと以外には、朝鮮との直接関係はなくなった。そして、一九四一年六月、中島敦はもう一つの植民地である南洋に向かうのである。

## 2 金史良

金史良の最初の日本語小説である「土城廓」が『堤防』二号に発表されたのは、一九三六年七月のことである。また、村山知義の紹介で『新潮』編集者榎崎勤をたずね、「二百枚ちかい中編小説を風呂敷包から取り出し、読んでみて欲しい」と頼み、日本で作家としての道を模索したのもほぼこの時期である(5)。しかし、時代はすでに急変し、朝鮮では言論に対する統制がいよいよ厳しくなりつつあった。そのさきがけになったのが、「土城廓」発表一ヶ月後の一九三六年八月に起こった東亜日報の「日章旗抹消事件」であった。一九三六年の夏のベルリン・オリンピックでマラソンの孫基禎選手が優勝したとき、彼の胸から日章旗を抹消して掲載したため、東亜日報は九ヶ月の停刊処分を受け、朝鮮日報も自ら停刊するに至ったのである。このような厳しい措置をとったのが、同年八月、赴任したばかりの南次郎朝鮮総督で、南総督は赴任当初から、以前の「一視同仁」のスローガンを強化して「内鮮一体」という論理を標榜し、戦時体制にむけて朝鮮の皇民化を押し進めた。以降、三七年七月の日中戦争、三八年二月には朝鮮陸軍特別志願兵令公布、同年三月には第三次朝鮮教育令へと戦時体制が強化されていくのである。とくに第三次朝鮮教育令では、以前の必須科目であった朝鮮語が随意科目に落とされたことで、朝鮮語の危機が明確に表面化した。これは後の一九四一年三月に改正され、朝鮮語は完全にカリキュラムから削除されたのである。金史良が一九三九年十月、「光の中に」をもって日本文壇に登場したのは、まさにこういう皇民化と戦時体制による朝鮮語の危機的な状況のさなかであった。また金史良の「光の中に」が芥川賞の候補作に選ばれた一九四〇年二月には、六ヶ月を期限として創氏改名が始まり、それが完了する八月には、朝鮮日報、東亜日報が廃刊されることになる。朝鮮文壇も日本と連動するかたちで、一九三九年十二月に「朝鮮文人協会」が設立され、四一年十一月には在来の朝鮮語雑誌が国策文学雑誌『国民文学』に統合される過程を経て、四三年四月には「朝鮮文人報国会」の発足を見ることになる。

一方、朝鮮では日本の支配による圧迫だけではなく、植民地内部の諸矛盾も噴出し、一九三七年二月には、白々教事件という前代未聞の陰惨な宗教事件が起こる。この事件は朝鮮が抱えているさまざまな問題を浮き彫りにするもので、金史良文学にも大きな影響を与えた事件であった。このように、金史良文学はますます厳しくなる時代条件の下で出発し、また、硬直した時代のさなかで形成された

ものである。それを反映するかのように、金史良文学には、危機を迎えている朝鮮語の問題が大きく取り上げられ、白々教事件の影が落とされ、また作品のいたるところで創氏改名への激しい憤りが窺える。

### 3 湯浅克衛

湯浅克衛は一九一六年、朝鮮に職を持っていた父親に連れられ、京畿道水原の水原公立尋常小学校に入學している。一九一六年前後の朝鮮は、以前の十二年から実施された土地調査令によるさまざまな矛盾を抱えたまま、憲兵制度による武断政治の基本方針はなんら変化もなく、一九一九年のいわゆる万歳事件に至る時期である。万歳運動は民族自決と朝鮮独立を訴える全国規模の民衆闘争で、それを湯浅克衛は小学四年の時に水原で目撃する。水原は万歳運動がとくに激しかった地域で、この郡内である有名な堤岩里虐殺事件が起こっているが、それらの模様を描いたのが、彼の文学の出発になる一九三四年の「カンナニ」である。また、氏が移住して成長した水原という街は、朝鮮のなかでも特殊な街である。四方が古い王朝時代の城壁に囲まれた伝統的な街でありながら、一方では総督府の農業機関が集中している朝鮮近代農業の中心地でもある。旧と新が入り交じり、それが朝鮮人と日本人という断層になり、その居住空間や生活においても見事に対立をなす、典型的な植民地の街であった。湯浅克衛の作品には、この水原を舞台にする作品が数多くあり、それらの作品では水原が重要なモチーフになっている。

一方、一九二三年京城中学校に入學した湯浅克衛は小山政憲などと『交友会雑誌』を主宰し、また同窓である中島敦とも親しく付き合うなどして卒業後、東京に渡り、一九三四年に作家として文壇に登場する。彼が東京において朝鮮を留守にしている間、朝鮮の事情は大きく変わり、宇垣総督による農村新興運動が一九三二年に、その精神運動である心田開發運動が一九三五年に実施され、朝鮮は急激に変貌することになる。「新しい朝鮮」「発展する朝鮮」をスローガンにして表面上は活気にあふれる時期であった。一九三六年四月湯浅克衛は水原に一時帰郷してこのような活況を目にし、「心田開發」という作品を残している。その後、戦時色が強まるなかで、一九三八年には大陸開拓文芸懇談会のメンバーになり、一九四三年には皇道朝鮮研究委員会の常任委員となって、いわゆる国策文学に深く関与したことになる。彼と行動をともにしたのが、同じく『改造』懸賞小説出身で『文芸首都』で活躍した張赫宙である。

### 4 田中英光と李石蕙

田中英光が横浜護謄製造株式会社の社員として朝鮮出張所（京城）に赴任したのは一九三五年四月である。以後二度の応召を経て、東京転勤を命じられるまで約8年間を朝鮮で過ごし、その間、一九四〇年四月「オリンポスの果実」をもって実質上の文学的出発をはたしている。田中英光が作家としての出発を始め、朝鮮文壇との結びつきを緊密にしていくこの時期には、すでに戦時体制の強化によって朝鮮文壇は閉塞の状態におちいつていた。前年の三九年十月には朝鮮文人協会が結成され、朝鮮文学は「新しい国民文学の建設と内鮮一体の具現」を標榜していた(6)。そして翌年の四一年十一月にはそれを実践するかのような国策雑誌『国民文学』の創刊を見るに至る。『国民文学』は従来の『朝光』と『人文評論』などの朝鮮語雑誌を統合して創ったもので、その当初の主旨とは違って、まもなく純日本語雑誌に変貌していく(7)。これで日本語の出来ない朝鮮の作家たちは発表紙面を全く失う。田中英光はその『国民文学』の創刊号に朝鮮で初めての小説を発表し、以後朝鮮文壇との結びつきを深めていくことになる。その過程で知り合い、最も親しい関係を維持したのが李石薫である。一九四一年十一月頃、渡満する湯浅克衛を囲んで出会った二人は、以後戦時体制を生きる同伴者として付き合い、田中英光は李石薫をモデルにした「碧空見えぬ」という小説まで書き残している。その後、田中英光は朝鮮文人協会の常任幹事として、一九四二年十一月には東京で開かれた大東亜文学者大会の後始末を終えたあと、一九四二年十二月東京転勤によって朝鮮を離れることになり、朝鮮での活動と李石薫との友情も終わることになる。

一方、同時期の李石薫は一九四〇年十二月、朝鮮文人協会が行った「銃後思想運動」の時局講演会に参加し、四一年初頭から習作期に試みた日本語小説の創作を再開している。そして、同年十一月には朝鮮文人協会の聖地巡礼代表として日本各地を訪問し、また同月の『国民文学』の創刊号には田中英光と並んで、以前の時局講演会の模様を描いた「静かな嵐」を発表している。この作品はさらに書き継がれ、一九四三年四月に国語連盟賞を授賞するが、その間の一九四二年五月には「静かな嵐」の内容にもなっている朝鮮徴兵制実施が発表され、これがきっかけで田中英光と文学的なやりとりが始まる。以降、戦時色がさらに深まるなかで、四三年八月第二回大東亜文学者大会が開かれるが、李石薫はその代表出席を辞退して、四四年五月満州に逃避してしまう。

## 5 張赫宙

妓生出身の女性を母にする両班階級の庶子として生まれた張赫宙が、本家を離れて母と朝鮮南部を転々としたのち、慶州で新しい日本型近代教育システムであ

る普通学校に入学したのは一九一三年四月のことである。ちょうどこの時期には、一九一〇年の日韓合併によって以前の旧韓国の教育が一掃されるかたちで、一九一一年に第一次朝鮮教育令が發布され、日本による本格的な近代教育システムが敷かれている。一九一三年に入学した張赫宙は、この実施まもなくの第一次朝鮮教育令による学校教育を受けることになる。第一次朝鮮教育令の大きな特徴は、以前の朝鮮人と朝鮮語を意味する「国民」、「国語」という言葉が、併合によって日本人と日本語を意味するようになったことであり、またそれによる「国語」教育の徹底である。合併以前の「処世に資する」ためであった日本語は、国語として「国民精神の宿る所」とされ、朝鮮語とその立場が逆転したのである(8)。この逆転は教科時数にもそのまま反映され、国語の時数は朝鮮語と漢文を合わせた時数のほぼ二倍に達していた。さらに他の学科の教授においても国語の使用が重視され、学校教育はほとんど日本語によってなされたと言っても過言ではない。張赫宙はこのような日本による近代教育システムのなかで日本語を学習し、一九三二年日本語小説「餓鬼道」を持って朝鮮人としては初めて日本文壇に登場するのである。日本語で教育を受け、日本語で表現できる最初の世代が張赫宙だったのである。

張赫宙が日本の文壇に登場した一九三二年というのは、ちょうど農村振興運動が実施された年でもある。一九三一年六月に赴任した宇垣一成総督は、極限に達している朝鮮農民の疲弊と惨状に対する対策として農村振興運動を実施したのである。小作農の没落と過度な小作料の徴収、劣悪な小作権などによって朝鮮農民の生活は完全に崩壊し、春になると食糧が切れ、草根皮木をかじる有り様であった(9)。張赫宙文学の出發はこの三〇年代前後の朝鮮農民の惨状を訴えるのが一つの目的だったのである。この農村振興運動は宇垣総督の離任と戦局の悪化によって、途中で心田開發運動という皇民化運動に変質してしまい、当初の目的に至らず終わってしまう。それ以降、戦時時局体制が強まるなかで、張赫宙は湯浅克衛と同じく一九三八年には大陸開拓文芸懇談会のメンバーになり、一九四三年には皇道朝鮮研究会の委員になっていわゆる親日文学に深く関与したことになる。その親日・国策の結果によって、朝鮮を代表する作家であった張赫宙は、戦後親日文学の代名詞のように批判され、その文学もほとんど抹殺されている状況である。

以上、昭和文学のなかで朝鮮と関わった六人の作家とその時代を簡単に紹介したが、本論ではそれぞれの文学を具体的に考察していく。

なお、本稿で使われている固有名詞の表記は、理解のため当時のままにしたことを断っておく。

- (1) 日本近代文学に現れた朝鮮像、あるいは朝鮮人像を歴史的に概観した研究としては、朴春日『近代日本文学における朝鮮像』（未来社、一九六九年）、金達寿『日本文学のなかの朝鮮人』（『文学』一九五九年一月）、鶴見俊輔「朝鮮人の登場する小説」（桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店、一九六七年所収）などがあり、近年では、川村湊の一連の作業がある。また、本論では対象にしなかったが、日本に翻訳された朝鮮文学の場合は、梶井陟の詳細な研究がある。
- (2) 柳原前光「朝鮮論稿」、一八七〇年
- (3) 池内輝雄「戦争と文学」（『岩波講座日本文学史』第十二巻「二〇世紀の文学」）、一九九六年
- (4) 中西伊之助の作品には、『赭土に芽ぐむもの』（一九二二、改造社）や、「不逞鮮人」（『改造』、一九二二年九月）があり、中野重治の「朝鮮の娘たち」は『無産者新聞』（第九十七号、一九二七年九月一日号）に、「雨の降る品川駅」は『改造』（第十一巻二号、一九二九年二月号）にそれぞれ発表された。
- (5) 京城府『京城府史』（第二巻、湘南堂書店へ復刻版）、一九八二年）を参照。同書には龍山に関する別欄があり、日本人街として変遷、発展する模様が詳しく紹介されている。
- (6) 宮田節子編・概説『朝鮮軍概要史』（十五年戦争極秘資料州十五、不二出版、一九八九年）
- (7) 李淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本』（ほるぷ出版、一九八五年）を参照。
- (8) 檜崎勤『作家の舞台裏』（読売新聞社、一九七〇年）
- (9) 一九三九年十月二九日、京城府民館で開かれた朝鮮文人結成大会の式場で李光洙は会長に就任し、その挨拶のなかで述べている。
- (10) 『国民文学』の発行当初は、国語版年四回、朝鮮語版年八回の発行予定であったが、四二年六月からは年間すべての発行を日本語で行う方針に変わっている。その目次は、「『国民文学』総目次」（『朱夏』五号、一九九三年）に詳しい。
- (11) 朝鮮教育に関する内容は、注（7）を参照。
- (12) 宇垣総督と農村振興運動については、宮田節子「植民地支配における『農村振興運動』——一九三〇年代日本ファシズムの朝鮮における展開」

(『季刊現代史』第二号、一九七三年)、山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』  
(岩波新書、一九七一年)に詳しい。